

天 界

(第 22 卷)

第 2 5 2 號

昭和17年第 6 號

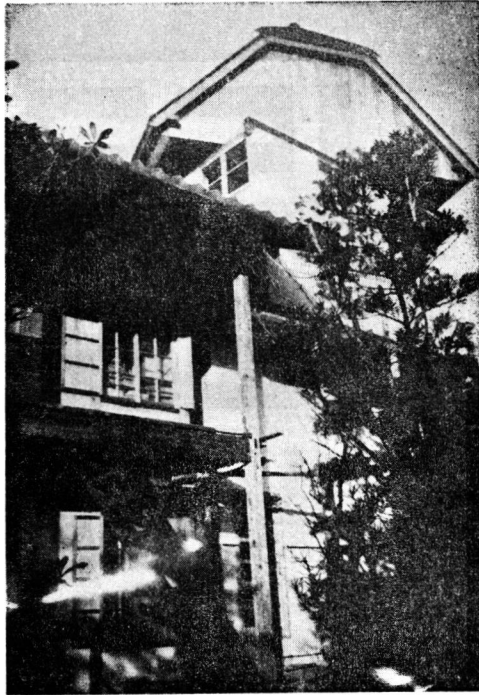
本 號 要 目

口 誌 寫 眞 田 上 天 文 臺

田 上 天 文 臺	山 本 一 清	175
ストップ・ワチで星の光を測る	E. A. フッス	184
日没時に於ける太陽の形	伊 藤 彊 自	186
黄道光覺書	竹 内 時 男	187
色のある星		188
來年(1943年)二月5日の皆既日蝕(第1報)	山 本 一 清	189
ガリレオ傳(3)	山 本 一 清	194
日蝕觀測行	坂 上 務	197
東亞天文協會定期總會豫報		199
防空監視(8旬)		199
光學術語の今昔	大 島 文 義	200
問 答(1件)		200
觀測部月報: 總報・機械・太陽・流星		201
た 4 頁 付 り		205
編 輯 後 記		206

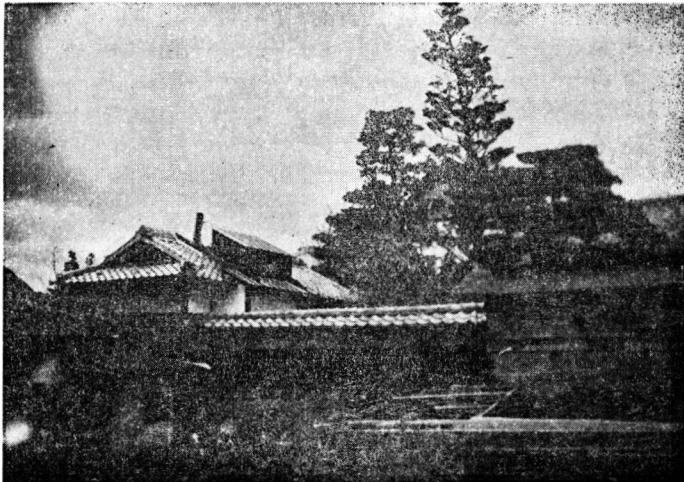
京大
11.5
11.5

『天界』第 21 卷索引



田上天文臺
(Tanakami Sternwarte)

大ドーム
晴れた日
屋根を
少しく
廻轉した姿



小ドーム (塀外より望む)

(大ドームは高い樹木のあちら)

説 明 書

9. 大流星の寫眞: 大正12年(1923年)九月12日の22時55分、歐洲チエコスロヴァキヤの首都プラハの國立天文臺に於いて、ヨルゼフ・クレベスタ氏が、天頂に近いアンドロメダ座の大星霧を撮影中に、偶然、この視野へ飛び込んで来た流星の寫眞である。カメラは、口径20センチのグック玉であつたため、レンズの明るさは14等星を撮影するに充分な強力なものであつたけれど、其の代り、視野が狭くて、流星の閃めきの始めから終りまでを一枚の乾板中に収め得なかつた恨みはあるが、しかし、大空の宇宙神秘を物語る大星霧の静かな星野に突如として闖入して来た此の流星のアペレフがまざままと現はれてゐる。——この寫眞は、流星ばかりでなく、大星霧附近の賑やかな星空の美觀をも楽しませるに充分である。寫眞は、向つて右が南、左が北、上が西、下が東で、大星霧の下方5センチばかりの所にあるのがアンドロメダ座のヌ星である。
10. ハリ大彗星: 過去2000年餘にわたり、幾度も々々太陽を訪ねて来たハリ彗星は、其の30回目の出現を、1909年九月11日に、ドイツ國ハイデルベルヒ天文臺のマクス・タルフ博士に捕へられた。それ以來、約1ケ年間、世界各地の天文家によつて寫眞に撮られた。この寫眞は、ヤルキース天文臺の故バリーナド博士が、1910年五月29日、口径20厘のブルース寫眞機で撮影したもので、この彗星の姿としては、最も美しいものである。——このつぎに此の星が再び現はれて来るのは、今から43年後の1955年頃である。
11. 南十字星あたり: いま陸海の皇軍が奮戦する大南洋の空には、春の五六月頃から、頭上に高くセントウルの大星座や、南十字の美しい星々が輝やく土地であると同時に、これ等の星空は、天文を楽しむ人々が、皆々から非常に憧れてゐる天空である。この天は、天の河の最も南部に相當し、ちょうどカシオペアと正反對の位置になつてゐるが、一等星や二等星が夥しく入り亂れて、花盛りのやうに空は美しい。中にも、四つの輝星が畫く十字形は、其の色、其の光、其の形、何れも吾々をして、飽かしめな魅力をもつてゐる。昔、航海者を導いた星、今は皇軍將士の目標となつてゐる星である。南十字の全星座を取りまいて、人頭馬身のセントウルが廣く天空を占めてゐる。北天の蛇遺ひに匹敵する雄大な姿であるが、特に此の星座にはアペ二つの一等星が並んでゐるのが目立つ。中にもこのア星は、全天空に於いて、吾が大陽系に最も近い距離にある恒星系であることは、天文を知る者は誰でも知つてゐる。眞に太陽系の隣り組の一つである。十字星の左下(南東)に大きい暗野がある。之れは有名な“炭袋”で、暗い星霧が天の河の一部をかくしてゐるものである。
12. 北極迴轉の姿: “神は數學者である”とジョーンズ博士は言つたが、この寫眞を見ると、“天然界は優秀な藝術家である”と言ひたくなる。無心に動く北極の天も、寫眞機を向けて、長い時間の露出を試みると、このやうな圖案模様を、光線は畫くのであつて、これは一つの宇宙美であると同時に、又、如何なるコンパスも及ばない正確無比の圓形群の幾何學である。北極そのものは星影の無い暗黒空であるが、すぐ其の下に北極星が力強い圓弧を畫いてゐるし、又、“見えない北極”の右1センチほどの所には小熊座ラ星も見えてゐる。更に其の右上3センチの所には同ア星があり、寫眞の右上の隅にはエプ星の弧の一部が現はれてゐる。この寫眞は1922年十一月16日、ロキヤ天文臺で固定カメラにより撮影したもので、偶然ながら、明るい流星が一つ(寫眞の左下から右上へ)飛んだのが寫つてゐるのも面白い。
13. ベルリン天文臺の大望遠鏡: 盟邦ドイツの首都ベルリン市内から郊外ノイ・バベルスベルグに移轉した大學天文臺に、新設された大屈折望遠鏡で、口径65センチ、焦點距離10米半、接眼部には二重運動の構造があつて、長焦點の星野寫眞を撮影する裝置を有し、同國第一の屈折赤道儀である。ツァイス會社の製作である。
14. ベルリン天文臺の大反射鏡: 同じくノイ・バベルスベルグにあるベルリン大學天文臺の反射望遠鏡で、歐洲大戦中、1915年に完成せるもの。口径122センチ、ニウトン焦點の長さ840センチ、又、カスグラン焦點の長さは24米である。同國第一の大反射鏡で、専ら恒星の寫眞觀測に用ゐられてゐる。ツァイス製。

東亞天文協會急報目錄

(天界244號のつゞき) (第507號—536號)

- 第507號 (1941年 九 月 7 日) フアン・ゲント彗星の位置豫報, 九月6日の月蝕
- 第508號 (1941年 九 月 11 日) 東亞天文協會の日蝕觀測について, 長野縣に本會の新天文臺設立
- 第509號 (1941年 九 月 14 日) 火星の中央經度の算出法
- 第510號 (1941年 九 月 14 日) 木星に新しい黒點
- 第511號 (1941年 九 月 15 日) 火星面の標準經度の豫報
- 第512號 (1941年 九 月 18 日) 部分蝕を觀測する心得, 山本會長いよ々々渡臺
- 第513號 (1941年 九 月 22 日) 臺灣の日蝕觀測概況, 本會支部の部分日蝕觀測
- 第514號 (1941年 九 月 24 日) 小遊星アリンダの軌道, 本會日蝕觀測隊歸る
- 第515號 (1941年 九 月 28 日) 本年十月中の火星面觀測豫報, 本年十月中の木星衛星の蝕の豫報
- 第516號 (1941年 九 月 30 日) 火星面の標準經度の豫報
- 第517號 (1941年 十 月 10 日) オリオン双子座流星觀測計畫
- 第518號 (1941年 十 月 24 日) 本年十一月中の火星面觀測豫報, 田上天文臺の建築工程
- 第519號 (1941年 十 月 25 日) 本年十一月中の木星衛星の蝕の豫報, プレテン再發行計畫進む, 觀測手引
- 第520號 (1941年 十 月 28 日) 火星の掩蔽
- 第521號 (1941年十一月 4 日) 火星の近狀そのほか, 1942年度年曆表
- 第522號 (1941年十一月 15 日) アルゴル變星の極小期, テュ・トワ彗星の軌道, フアン・ゲント彗星
- 第523號 (1941年十一月 25 日) 第二シグスマン・ワハマン彗星
- 第524號 (1941年十一月 27 日) 本年十二月中の木星衛星の蝕の豫報, 日蝕の紀念放送録音レコード
- 第525號 (1941年十一月 27 日) 本年十二月中の火星面觀測豫報, アルデバラン星の掩蔽, 出版企劃の二著
- 第526號 (1941年十二月 1 日) 太陽視差の新決定, 日蝕録音レコード
- 第527號 (1941年十二月 10 日) 天體觀測戰線の奮起を望む, 本會本部の移轉
- 第528號 (1941年十二月 17 日) 太陽コロナの正體は, 長島天文臺の創設
- 第529號 (1942年 一 月 10 日) 流星及び黃道光の觀測者へ, ラングリ號の沈没に因んで
- 第530號 (1942年 一 月 20 日) 四分儀座流星群の觀測結果, 太陽黒點の觀測者に告ぐ
- 第531號 (1942年 二 月 18 日) 新彗星の發見(1942a), 本會の器械課に就いて
- 第532號 (1942年 二 月 27 日) 更に新彗星發見(1942b), ベルナスコニ彗星(1942a)
- 第533號 (1942年 三 月 1 日) 本會の役員の各地出張に就いて, 東京講演
- 第534號 (1942年 三 月 2 日) 太陽黒點の活動盛んなり, 再版二著
- 第535號 (1942年 三 月 12 日) 太陽黒點旬報(第1號), プレテン發行延引
- 第536號 (1942年 三 月 23 日) 太陽面三月中旬報(第2號), 天文寫眞續刊

東亞天文協會
會員に關する報告

〔入會者〕	加藤重成(濱松)	小林義惠(東京)
水野敦(東京)	尾上守夫(東京)	大野正勝(兵庫)
井利朗(岐阜)	藤井昭三郎(京都)	前田靜雄(東京)
武盛一(徳島)		
〔觀測部入部〕	丸山源三郎(東京)	加藤重成(濱松)
池敦(東京)	菊地弘(東京)	北見彰久(大阪)
水谷雄二(東京)		
〔逝去〕	江川義(千葉)	綿貫博通(神戸)

(注意) 御移轉の節には直ちに(前住所をも並記して)御通知下さい。觀測部(へ入部)の方は其旨附記して下さい。

昭和17年分會費部費領收者芳名

會費(4圓)	平井利朗(岐阜)	大野正勝(兵庫)
府立化學工業天文部(東京)	龜井啓一(和歌山)	加藤重成(濱松)
藤井昭三郎(京都)	喜田茂(滿洲)	津野田誠吾(油頭)
水野敦(東京)	尾上守夫(東京)	泉慶雄(宮崎)
清水謙三(大阪)	山田勇次(東京)	渡木慶雄(宮崎)
中島節夫(岡山)	飯義壽(今治)	松山基範(京都)
井上啓一(京都)	高木重子(兵庫)	金崎常和(福岡)
藤本善男(秋田)	森龍太郎(浦和)	菅野常吉(東京)
田村文造(大阪)	大塚桂三(大阪)	山下吉三郎(東京)
八木澤誠次(青森)	山口善造(滋賀)	乾久朗(兵庫)
秦武彦(東京)	松本大三(京都)	西本十三男(吳)
恩賜科學館(京城)	宇野良雄(京都)	前田靜雄(東京)
北川治平(滿洲)	栗野正雄(神奈川)	武見盛一(徳島)
菅原兵衛(岩手)	垂井増太郎(京都)	市藤佐平(岡山)
松瀨隆國(横須賀)	中野繁(東京)	眞田安夫(廣島)
西本誠治(鹿兒島)	幾島五郎(大阪)	明徳圖書館(今治)
同(一部完納)	小山丑松(新潟)	本井公夫(熊本)
部費(2圓40錢)	加藤重成(濱松)	津野田誠吾(油頭)
小泉功(兵庫)	山田勇次(東京)	渡木慶雄(宮崎)
小金崎常和(福岡)	菅野常吉(東京)	秦武彦(東京)
松本大三(京都)	幾島五郎(大阪)	白井右友(京都)
栗原正雄(東京)		
同(一部完納)	小山丑松(新潟)	菊地弘(東京)
中野繁(東京)		
部費(3圓50錢)	北見彰久(大阪)	

(順序不同)

(領收通知に代ふ)

(17-3-30締切)

1942年 六月の天象 (時刻は日本標準時)

太陽は黄道を北へ々と登りつめ、22日0時半に夏至點へ到着する。之れが、天文學的に言ふ春の終りであり、同時に夏の初めである。また、全地球に於いて、この日、北半球では晝が最も長く、夜は最も短い。南半球では其の反對たること、言ふまでない。

10日は“時の記念日”で、言はず、之れは天文學の記念日である。時刻を定め、天文臺を建て給ひし天智天皇の御偉徳を偲びつゝ、近江神宮と山科御陵に參詣する日である。

月は、五月30日の満月を過ぎて、この6日には下弦、14日には新月となり、22日には上弦、28日には満月となる。又、14日は地球より最遠、28日は最近となる。近地點で起る満月は、今年中、最もスバラシク、大きいものだらう。

この月初め、水星は日没後の西天に見え、1日には東留しつゝ降交點を通過するが、その後は漸次太陽へ近づき、11日に遠日點を通過後、13日に内合となり、以後、曉の星となる。しかし、離角も小さく、時期も悪くて、強いて觀望すべき時ではない。

金星は相變らず早曉の東天に輝やく明星で、10日に月と會合し、16日に黄緯は極南となる。又、月末の30日には、天王星と會合し、其の南 $1^{\circ}41'$ にある。

火星は、名残り惜しげに、今尙、日没後の西の低空に赤く輝やき、8日には黄緯が極北、又、17日には月と近づき、其の北方 4° にある。

木星も、いよ々々太陽に近接した。26日の2時には正しく會合し、それから曉の星となる。こんなわけだから、こゝ暫くは、木星觀望の時期でない。來月或は來々月まで、萬事、良い期節の到來を待つべきである。

土星は、木星よりも一足先きに東天へまはつて了つたから、この月の末ごろからは望遠鏡に見える。しかし、特別な熱心家でない限り、別に急ぐ必要はあるまい。

天王星も觀測に不便であるが、海王星は乙女座β星の東に於いて、9日に停留する。

東亞天文協會

大正9年(1920年)創立, 昭和7年(1932年)改名

會長	山本一清	(滋賀縣草津町大路井420; 同栗太郎上田上村熊生)
副會長	宮森作造	小槇孝二郎
理事	宮森作造	觀測部長 木邊成麿
專務理事	中村覺	經理部長 宇野良雄
教育部長	高城武夫	事業部長 大口周作
報導部長	山本一清	理事(無任所) 美田爲三

本部所在地 田上天文臺 滋賀縣栗大郡上田上
 事務所所在地 滋賀縣堅田局區內
 經營する天文台 倉敷天文台 岡山縣倉敷市
 大阪支部所在地 大阪市電氣科學館プラネタリウム (大阪市四ツ橋)
 臺灣支部 臺北市公會堂內
 黃道光觀測所 廣島縣沼隈郡瀬戸村

東亞天文協會觀測部

1. 流星課 (課長 和歌山縣有田郡金屋 小槇孝二郎, 幹事 宇野良雄)
2. 彗星課 (課長 滋賀縣草津町大路井420 山本 進)
3. 變星課 (課長 木邊成麿, 幹事 小澤喜一)
4. 太陽課 (課長 缺, 幹事 靜岡縣志太郡吉永村吉永1768 大石辰次)
5. 黃道光課 (課長 田上天文臺 山本一清, 幹事 本田 實)
6. 豫報課 (課長 山本一清, 幹事 神田壹雄)
7. 機械課 (課長 滋賀縣野洲郡中里村木部 木邊成麿)
8. 寫真課 (課長 大津市鹿關町 堀井政三)
9. 遊星面課 (課長 兵庫縣川邊郡雲雀丘 伊達英太郎, 幹事 木邊成麿)
10. 掩蔽課 (課長 大阪市住吉區萬代東4の6 高城武夫)
11. 月面課 (課長 伊達英太郎)
12. 歷史研究課 (課長 兵庫縣武庫郡本山村岡本高石344 井本 進)

觀測部規定 (昭和6年11月22日制定)

- 第1條 本觀測部ハ東亞天文協會ノ目的ヲ達スル爲メノ一事業トシテ, 天體ノ觀測研究ヲ行フ。
- 第2條, 第3條, 第6條 (略)
- 第4條 東亞天文協會員ハ希望ニヨリ本觀測部員トナル事ガ出來ル。
- 第5條 部員ハ觀測上ノ必要ニヨリ課長ノ指導及ビ東亞天文協會ニ於テ, 東亞天文協會急報並ビニ種々ノ印刷物ノ配布ヲ受ケル。

御申込みは 滋賀縣堅田局區內 東亞天文協會 (電話は堅田郵便局)
 (送金は安全, 確實な 振替口座 大阪56765番へ)

天界 第252號 昭和17年4月28日印刷 昭17年5月1日發行 (定價金40錢) 送料金1錢

編輯兼發行者 滋賀縣滋賀郡眞野村大字眞野513

東亞天文協會 (振替大阪56765)
 (代表者山本一清)
 日本出版文化協會第2種會員(第220038番)

發行所 同上
 印刷所 京都市上京區上樺木町千本東入
 印刷者 同上
 配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地

眞美印刷所 [電西陣3702]
 橋本岩太郎
 日本出版配給株式會社